

ステイラーズキャップ「200」達成!

チームの歴史に 名前を刻むことができた。

山下 裕史

PR



PROFILE ● やました ひろし
1986年1月1日生まれ、大阪府四条畷市出身。183cm・120kg。
ポジションはプロップ。都島工業高校→京都産業大学→コベルコ神戸スティーラーズ(2008年度入団)公式戦出場回数200

2008年度に入団して以来、「3番」を付け、スクラムの最前列で体を張り続ける「ヤンブー」こと、山下裕史が、「NTTリーグワン2022-23」第16節横浜キャノンイーグルス戦でチーム公式戦出場200試合を達成した。1994年度から2011年度まで18年間在籍し、46歳まで現役を続けた鉄人、伊藤剛臣氏が持つ「198」試合出場の記録を更新し、打ち立てた金字塔だ。次なるターゲットは、今シーズン日野レッドドルフィンズを退団した久富雄一氏が持つリーグ戦通算最多出場記録「177」だ。ステイラーズキャップ「200」はあくまでも通過点。これからも山下はスクラムを押し続ける。(取材日:2023年4月26日)

巡り合わせが良かった

前人未到の公式戦200試合出場という大記録が達成された第16節横浜キャノンイーグルス戦は、26-52で完敗。喜びと悔しさが入り混じる試合となり、「嬉しさよりも負けたことに対して申し訳ない気持ちの方が強かったですね」と振り返る。ただ、記録達成については、「偉大な先輩がたくさんいる中で、タケさん(伊藤剛臣)の198試合出場を超えることができた。チームの歴史に名前を刻めたことを誇らしく思います」と、笑顔を見せる。200試合出場を意識しはじめたのは、リーグワン初年度の昨シーズン。「1番」、「3番」でスクラムを組んだ平島久照(現コーチ)のステイラーズキャップが「178」、山下が「177」となり、「一緒に200試合出場を達成できたらいいな」と思うようになったそうだ。残念ながら平島は、昨シーズンをもって現役を引退。山下の記録達成をコーチとして見守った。

平島は「ヤンブーには、ずっと200試合出場を達成してほしいと思っていたので、素直に嬉しかったですね」と自分のことのように喜ぶ。

子供の頃は、野球をしていて、「巨人の4番になることが山下の夢だった。それが、都島工業高校1年の時にクラスメイトに誘われて、ラグビー部へ。その後、スクラムに力を入れる京都産業大学でもまれて、2008年4月、神戸スティーラーズに入団。「神戸の3番」として1年目から試合に出場した。平島は当時を振り返り、「体は大きかったですが、入ってきた時は、そこまでスクラムが強いという印象はなくて。ヤンブーが入団した年に、カンビー(ステイブ・カンバランド)

出場記録177試合を超えること。

「今、リーグ戦通算出場数が166なんですけど、ここなら狙えるかなって」と山下。平島に山下に今後狙ってほしい記録を聞くと、「次は年齢ですね。まずは40歳まで続けてほしいです」ときっぱり。それを山下に伝えると、「40歳ですか(苦笑)！まだ見えないですね。まずは目の前の1年、1試合を積み重ねていきます！」

来シーズン、前オーストラリア代表ヘッドコーチで、チーフスをスパーラグビー連覇に導いたデイブ・レニー氏がヘッドコーチに就任する。新体制でも山下はきつとまっくハマってみせ、出場記録を伸ばしてくれるはずだ。

長く活躍する秘訣とは

「巡り合わせですよね。自分が入団した年にスクラムコーチが加わって、指導者に恵まれたと思います」と述懐する。入団1年目でカンバランド、2012年にエディー・ジャパンに招集され、スクラムコーチのマルク・ダルマゾから多くを学んだ。

山下も

長く活躍し続けるには、怪我をしないことが先決だ。「頑丈な体に産んでくれた母に感謝です」と改めて母親に頭を下げる。もちろん、体のケアも怠らない。しかし、今年37歳。コンディション管理に苦労するようになってきた。一度トレーニングを辞めてしまうと、次に動き出す時、エンジンがかかるまでに時間がかかるようになったと感じている。特に2020年は、新型コロナウイルスでトップリーグが中止になり、緊急事態宣言が発出された時はトレーニングができず、体力を戻すのが大変だった。それも、ここ数年シーズンはオフシーズンも休みなく週7日で動いている。今シーズンも最終節の翌日からクラブハウスに足を運び、バイクを漕いだり、ウエイトトレーニングをしたり、汗を流している。自主練習の後は疲労回復に良いとされる交代浴。話を聞いた4月26日も、前田剛や渡邊隆之ら社員選手とともに出社する前の朝6時頃からクラブハウスに集まり、早朝トレーニングを行ったそうだ。ちなみに、山本幸輝が「大工さんか!」というくらい、朝起きるのが早いという山下の習慣は、エディー・ジャパンで身に



スクラムの強さだけでなくディフェンスにも定評がある。

付いたもの。「社員選手ということもあって、出社前にトレーニングするのが、自分の生活スタイルに合ったというのがあります」

また、シーズン中は、試合の2日前、練習を終えた後、温泉施設に足を運び、疲労を取り除く。これも10年ほど前から続けている。なんでも温泉等で疲労を回復することで、2日後のコンディションが良くなると思いたからだ。なおかつ、食事にも気を付けている。入団当初は、暴飲暴食は当たり前。1年目のシーズンが終わり、オフ期間中には、135キロになったことも。

「年々代謝が悪くなってきましたからね。夜中12時のラーメンは美味しいけれど、それを食べることで体がどうなるのか分かっていきますから」

今では、小さなお茶碗にご飯を少し。その分、肉

信念を持たないのが信念

これまでの15シーズン、大きな怪我もなく順風満帆に思えるが、ピンチと思えることはあったのだろうか。疑問に思い、山下に直撃すると、「ヘッドコーチの交代と新人プロップが入ってきた時」と明言した。ヘッドコーチが変わると、これまでの経歴はリセットされ、1からの競争になる。そこで、競争を勝ち抜くため、山下は柔軟に対応し、ヘッドコーチの要求に応えてきた。

「ラグビーに対して、僕は信念がないというか、ヘッドコーチが『こうせえ』と言うことを素直にやってきました。ハマる、ハマらない言葉がありますが、自分からヘッドコーチの考えにハマりにいかないといけないかなと思っています」

意外と言うと失礼かもしれないが、策士なのだ。だからプロップであってもパススキルを求められたウエイン・スミスの体制にもうまく適応し「スキルが伸びて成長できた」と言う。

200試合という1つの目標を達成し、次なるターゲットは、今シーズン日野レッドドルフィンズを退団した久富雄一氏が持つリーグ戦通算最多



スクラムを押し込んで反則を取った際、喜ばないのも山下流。「キッカーがプレースキックを決めて、いちいち大喜びしないでしょ。それと同じですよ」。これがスクラム職人の矜持である。